一日目： 大学 4 年の冬学期もおおづめ、いろいろと苦労はしたが、すでに就職先も決まり、あとは残り単位取得のため最後の試験勉強を迎えていた。そして、試験も無事終了し、出来具合も上々で、あとは大学の掲示板の卒業確定者に自分の名前が載っているのを確認するだけで、意気揚揚と悔いを残すことなく遊びふけていた。このとき、まだあのような結果が待ち受けているとも知らずに … 。

今日は大学で卒業確定者が発表されるので、私は達成感と安心感を得るため大学へ行った。大学に到着するとまず向かうところは掲示板があるとこ。そして、掲示板に目を向けると、ない！何度みても自分の名前がない！事務員に聞くと、単位が足りてない、とのこと。一科目テストを受け忘れてることに気づかされた。駆け足で担当教授の研究室に向かい、事情を説明し、何とかならないものかと懇願した。すると、教授がレポート 100 枚と言う。私は初め自分の耳を疑い再度聞くと、今度は教授の口からはっきりと「レポート 100 枚、期限は 7 日間」、と聞こえた。私は、なかば放心状態で研究室をあとにしたが、100 枚やれば卒業できるという事実に向かい、急ぎ家路に着いた。このとき、午後 8 時。こうして私の大学生活が 7 日間追加されることになり、その一日目は終了した。

二日目：この日は、資料集めのため、地元の図書館や大型本屋などを駆けずり回り、家に帰ってきた頃にはすでに日が暮れていた。私はこれで満足してしまったのであろうか、本を開くことはなく、すぐに布団の中に潜り込み目を閉じてしまった。時間がないというのに、まだその危機感が体全体を支配していないのであろう。　二日目終了。

三日目；朝から本を読んでいる。ひたすら読みつづける。自分でさえ、こんなに読みつづけることが出来なんて驚くくらいに。体や脳が危機感を感じ始めたのであろうか。三日目にしたことと言えば、読書と一度の食事とトイレだけである。　三日目終了。

四日目；三日目とほぼ同じである。唯一変わったことといえば、食事のメニューが変わったぐらいである。「四日目も終わり、残り日数はあと三日」寝る前にふとこんなことを思い、自分の置かれてる状況の崖っぷちさを再確認して、少し泣きたくなってきた。　四日目終了。

五日目；やっと、パソコンの前に座る段階になった。少し効率が悪かったかな、と思いながらも、とにかく書き始めることにした。書きだすと、思いのほか順調に進み、午前中には 10 枚近く書き終えることが出来た。この調子でいけば 7

日目までには終わるかなと思いはじめ, 自分の中の危機感が少し薄らいでいった。結局この日は１２枚しか書くことが出来ず就寝。最悪なシナリオを想像してしまい怖くなり、なかなか寝付けなかったが。　五日目終了。

六日目；生まれてこのかた、こんなに頑張った日があるであろうか。勉強や運動、日常生活においてもこれほど頑張った日は後にも先にもないであろう。なにしろ、一日で３０枚書きあげてしまったのである。とはいうものの、昨日のと足して、４２枚。残り一日であと５８枚。絶望的な数字である。やばい、やばい、と心の中で１０００回くらい繰り返しながら、いつのまにか寝てしまった。　六日目終了。

七日目；ついに、この日がやってきてしまった。とてもじゃないが、１００枚には届きそうにないし、気力のほうがもうなくなってしまっていたので、とにかくこのレポートを終わらすことが先決になっていた。私は、５枚ほど書き、このレポートを終了することにした。そして、昼過ぎに教授のところに持っていき教授の返事を待っていた。そのあいだ、これからの自分の未来、親に対しての報告など、悲観的なことを考え続けていた。その時、教授の口が動いた！「結果は言わなくてもわかるよね、来年また私の講義を受講してください」それを聞いた私は、頭の中が真っ白になり、わが人生の先に見えていた輝かしい未来のドアが閉じていくのが見えた。そこに残された私は暗闇の中でただ一人、立ちすくんで、動こうとはしなかった。

こうして、私の大学生活「最後の７日間」は幕を閉じたのである。

月曜日
公園でひとり、「彼女なんていたって結局上手につきあえないから、別にいいや！」なーんて考えていたら、別に哀しくないのに涙が止まらなくなりました。そのままぼーっとしていたら、ついさっきまでいたはずのファミリーや子供たち、おじさんが、急に姿を消したと思ったら空を見上げると、大凧に一枚一枚くっついて空を飛び、僕の悪口をずーっと言ってきます。

火曜日
ある朝、僕がいつものように学校に行く道を歩いていると、大変不思議な現象が起こりました。どんなに歩いても学校に着かない、注意深く観察していると何度も何度も同じ道をぐるぐるぐるぐる回っている。このままでは遅刻です、遅刻をしたらまた鬼ひげ先生に骨の油を吸われてしまいます。あんなに痛い事はもう絶対嫌なので、全力疾走で角を曲がると…　これじゃいつまでたっても学校には着かないわけで、僕の先回りをしたいたずら力士四人組が景色を持ち上げて曲げていたのです。僕は力士に「やめてください」と言いましたが、力士は「やめてほしかったらアレを持って来い。アレはいいよなぁ、甘ーくて…」と言って口のまわりをベロベロなめ回しました。「アレは、高倉先輩に脅し取られたので持っていない」とウソをつきました。するとバカな力士はそれを真に受け、「じゃ、高倉先輩の所に連れて行け」と言ってきたのです。高倉先輩なんて名前はとっさについたウソだったのですが、僕は引けないので力士と一緒に学校に行くと、ちょうど高倉先輩が授業をサボってタバコを吸っていました。力士たちが何も知らない高倉先輩に向かって「アレを出せ！　アレを出せ！」と言うと高倉先輩はあわてて壷を隠して「知らない！　知らない！」と言いましたが、力士たちは問答無用で高倉先輩を袋叩きにしました。なんだかものすごくスーっとしました。でもこのままじゃ僕のアレが力士に取られてしまうし、なにより一ヶ月前に高倉先輩に取られたＭＤウォークマンも帰って来ない。そういえば、鬼ひげ先生の授業で「力士にお花を混ぜるとアレになる」と習ったのを思い出したので、校門のまわりに咲いていたグラジオラスをちぎって振りかけたら、シュワシュワ言って力士は溶けてしまいました。僕は、かなりの量のアレを手ですくって壷に集めるのに夢中になっていると、すぐそばに金属性のとがったストローを持って鬼ひげ先生が立っていました。

水曜日
お休みなので釣り堀ですごしていると、さすがに平日の昼、ほとんど人がいません。広い堀の向こう側におじさんがひとり座っているだけです。気にせず釣り糸を垂れていると、いきなり当たりがあったので引き上げると、水面から上

がって来たのは古い仮面ライダーの人形。気を取り直してもう一度投げるとまた当たり、今度は上ばきが片方。もう一度、今度は星の形のバッジ。ふと見ると、向かいのおじさんが無表情のまま僕を笑っています。恥ずかしいやら悔しいやらでどんどん釣っていると、汽車のおもちゃ、星野君のペンケース、星野君のマンガ本、星野君の漢字練習帳、星野君の友情、星野君の悲しみ、星野君の怒り、と魚は釣れず星野君関連の物ばかりが釣れ、ひとつ釣れる度に釣り堀がどんどん小さくなっていきます。気がつくと釣り堀は穴ぼこのようになっていて、目の前に近づいたおじさんが「次は…　僕が描いたマンガが釣れるね…」と言って大笑いしました。

　もう釣るのが嫌になって釣り竿をしまおうとすると、穴の中から黄色い手が出て来て竿をつかみました。僕が竿を取られまいと引っ張ると、穴の中に引きこまれてしまいました。そこはマンガクラブの部室でした。目の前には星野君が描いた「正義超人カレーライスマン」がいました。僕は「やられる！」と思って僕が描いた事になっているほうの「カレーキング」を呼びましたが、キングはクラスメイトにちやほやされていて僕の気持ちに気づきません。僕は逃げ出しました。このままここにいたら明日も学校に行けない。ただでさえここ二週間連続で開校記念日なことに釣り堀のおじさんも怪しんでると言うのに！

木曜日

僕の家の玄関にはセンサー式の明かりが付いていて、僕が家に帰って来るとパッと明かりが点く、実に良い、正直者だ。それに引き換えうちの前の児童販売機はなんだ！　いつでも僕が前を通ると明かりが点いている。「私は働き者です！　いつもここに立って貴方がジュースを買うのをお待ちしておりますよ！」というおべんちゃらを使う。僕が見てない時はサボってるくせに。サボってるどころか僕が外に行かない日には、手足を出してロボットに変形し、僕を監視しているくせに！　そして近所中に僕の悪口を触れまわる。あいつは「アリガトウゴザイマシタ」以外もしゃべれるんだ！　一度だけ「アワレデゴザイマスナ！」と言ったのを聴いた事がある！　僕の悪口を言ってるんだ！　四六時中僕を監視して、僕が来そうになったらサッと戻る、そして何食わぬ顔だ。証拠はたくさんある。まず、なぜ僕の好きなジュースがすぐになくなるのか？　それは嫌がらせだ。暴暴茶の味に慣れた頃、わざとラインナップから消すとは!!

　ひどいにも程がある。寒い日に「あたたか～い」を押したのにも関わらず、「あんまりあたたかくない」が出ることもある。むごい時にはポッカコーヒーの顔が僕をバカにしている時まである。釣銭口に百円玉が入っていたことがあったが、あれは「オイ貧乏人！　百円くれてやるから取れよ！」ということか!!　頭に来て千円札をねじ込んだら、「お前みたいな貧乏人が千円持ってくるなんて、ニセ札に決まってる！」と受けつけない。何度泣いたことか!! い

つか尻尾を掴んでやろうと思い、フェイントをかけてふり向いたり、真夜中に家を飛び出したりしているが、タッチの差でとぼけられる。そして何食わぬ顔だ。きっとあの事を根に持ってんだろう！　子供の頃じゃないか !!

金曜日
あまりに退屈だったので新聞を読んでいると、「間違い探しクイズ」なる物が載っていました。「右の絵と左の絵には五個の間違いがあります」という物でした。煙突の煙が逆、左の絵の車にバックミラーが無い、平日の昼間なのに僕が家にいる、と、ここまではすぐにわかったのですが、その後がわかりません。考えれば考えるほど頭が痛くなってきました。注意深く観察しつつトイレに行くと、わかりました。トイレの芳香剤のにおいがいつもよりきつい。これであと一個です。居間で母親をじっと見ているとまたわかりました、エプロンをしている。母親がエプロンをしているのはおかしな事ではないと思わせるのが引っかけです。そのうえ、中指にバンソウコウを巻いています。去年は巻いていなかった。これで全部わかりました。ところが、部屋に戻る途中玄関を見ると、靴が全部揃えてあります。普通は一足ぐらい揃っていないものなのに...
　六個目の間違いです。問題には「五個間違いがある」と書いてあったのに。あ！　それも間違いか！　そうです、五個というのが間違いで、本当はもっとたくさんの間違いがあるのです。大変忙しくなってきました。洗面所の鏡の中に間違いがありそうだと思いじっと見つめていると、鏡はなかなか尻尾を見せません。ようやく、鏡の中の僕の目の下には病的なくまがある事を発見。しかも、鏡の間違いを探し終わったら時計が夜の九時を指しているという間違いも発見しました。それにともない外も暗く、親父が帰宅していたのもこれ大変な間違いです。こっちを見ている両親をじっと見ていると、どんどん間違いがわかります。僕は、産まれた時に四件隣の三沢さんの家の子供として産まれたのに、ここにいるのが間違いです。慶応大学の学生のはずの僕が、予備校に四年も通ってるのも間違いです。間違いだらけで嫌になり、自分の部屋に戻ると、キャメロン星人のジェリーがもっとたくさんの間違いを教えてくれました。僕はそのひとつひとつにマジックで× をつけて行きました。もはや家中が× です。顔中バッテンを描かれているのに両親が怒らないのも間違いです

土曜日
頭が痒いのでかいていたらわかったこと。実際は頭蓋骨の裏が痒いのだということ。しかし頭蓋骨の裏をかく事はできない。そこで僕は、耳から頭に入り頭蓋骨の裏側にまわる事にしました。幸い僕は猛烈な頭の痒さに、僕が侵入しようとしている事に気づいていません。ドリルタンクに乗りこんで、耳に入ってみるとそりゃあ痒いはずですわ。脳ミソの隙間に中二の時の長谷川さんが入り込んでるんですから。正直に言います。長谷川さんは僕の初恋の人です。でき

たら手荒いなマネはしたくなかった、でもそんなひと時の感情に流されていたらこっちがひどい目に会います。現に僕は頭の痒さがピークに達してしまい、猛烈にのたうち回ってるではないですか。操縦席のモニターに映し出された僕は、壁に死体をぶつけたりもしています。攻撃するしか無い…　そう思った刹那、長谷川さんがハンギョドンのピンクの便箋を投げてきました。便箋には「ずっと好きでした。屋上で待つ」と書かれています。僕は一目散に中学校の屋上を目指しました。

　頭の中にある中学校は、ものすごい量のティッシュの山の中に埋もれていますが、ドリルをフル回転して入りました。しかし遅れをとってしまいました。一歩違いであの時の僕が先に屋上に着いていました。「ワナだー！　ワナなんだー!!」、叫んだものの、興奮状態の僕には届かず、四人の長谷川さんにすっかり囲まれていました。もちろん長谷川さんが四人いるはずはありません、そのうち三人は黒田さん、北川さん、若井さんです。鼓膜が破れんばかりに笑う三人と、体だけが虫になった長谷川さん。僕はまだ異変に気づかずにきょとんとしています。そのうち長谷川さん虫が鳴き出しました。「モーイキモーイキモーイキモーイキモーイキモーイキモーイキモーイ…」、キレイな虫には不似合いなほどの不愉快な鳴き声でした。その声を聞いていよいよ僕が限界に近づき、お母さんにやつ当たりを始めました。仕方なく僕がドリルミサイルを撃ちこむと、中学校の三年間の事は全て忘れてしまいました。

日曜日
いつのまにかセカイがとけていた。キャメロン星人のジェリーがとかしたらしい。

◎ 月曜日　最近の日本と北朝鮮の事情は悪化.. 拉致問題の北朝鮮の認知.. ねつ造.. 。これまで我慢に我慢をかさねてきた○ 内閣は.. これまで強化してきた北朝鮮の経済政策をいっそう強化することに.. 。輸入のストップ.. 金融機関の停止.. 。嗚呼.. これが世界の破滅をもたらすとは..

◎ 火曜日　この日は北朝鮮のテレビで過激な報道が流れていた.. マスコミ.. 新聞.. ニュースなどではアメリカはもはや眼中になく.. 矛先は日本に.. あのかつて大日本帝国主義を唄って暴利を振るっていた日本がにくいと.. 。

◎ 水曜日　マスコミ騒動が過熱するなか.. 日本内閣の◎ 内閣は朝鮮の拉致問題についてまたとりあげている.. 。どうやら横田めぐみ嬢の朝鮮での生存が確認されたからであろうか。日本国内でが加熱！白熱.. 。この時私は心中で感じた.. このむなさわぎ..

◎ 木曜日　この日は日本と朝鮮とのめぐみ嬢を引き返すようにと人質釈放の要請が行われた.. 。しかしこれに対し完全に日本のいいがかえりと向こうは全面否認.. そして経済制裁のストップをするよう警告.. いかり狂う.. 日本国民．どうする．日本.. 所詮アメリカに丸め込まれた刃のない日本にあまりにも酷な話.. 嗚呼

◎ 金曜日　この日は日本国民.. いや世界人類が驚愕した日かもしれない.. 北朝鮮へのまさかの発言.. 核保有の凍結.. 使用を発表.. そしてなんと日本国土への制圧を発表したのである。この時.. 北朝鮮の中ではあらゆるプロジェクトが発動されていた。このプロジェクトを対日清浄化計画.. こう金坊は呼んでいた。嗚呼おそろしや

◎ 土曜　北朝鮮の発言によって日本国内は狂気がはしっていた。国内ではパニック症候群になる者が続質！あらゆる宗教団体も日本.. いや世界の破滅を示唆していた。この極限の緊張状態.. 。アメリカはこの緊急の状態を奪回するために北へのゲリラ潜入をこころみた.. 。混乱の中、暴徒は増え.. 国内では犯罪が急増.. 。金坊から突然のメッセージが.. 。格を日本へ投下するという破滅の戦争宣言を発表.. 。どうなる日本.. 。そしてその日時は月曜の正午。この時、アメリカンのある兵士はこう叫んだ.. 。OH！ジーザス !! 破滅.. そう世界の破滅.. 狂気に満ちた金坊の暴走。

◎ 日曜　核投下まであと一日.. 。この日の日本、世界は混乱のさなか.. どうしてこうも急に世の中は変わってしまうのか.. 。日本では暴徒.. そして破滅願望型の黒沢教集団がフジテレビ.. ならびに様々なテレビ局を占領.. なんと日本

の内閣を全員抹殺してしまっていた。ちなみに有名私立ではもはや授業など皆無.. 暴徒によって破滅が行われていた。そして私はそのさなか情報室でおもむろにタイピングしこの記録を.. 。もし明日いきて世界.. 地球が存在するなら.. そう思いつづった。キャンパス内では殺戮の最中.. 手元にある青酸カリ.. 私は願う！世界の平和！私は願う！愛と輪廻転生の奇跡.. 。そう思い私はびんの蓋をあけた.. 。

月曜日、わたしはいつもどおり妻に玄関まで送られて、高校生の息子と一緒に家を出、 勤め先に向かった。新宿駅で乗り換える。相変わらず駅構内を急ぐ人の数が多い。ひとの動きはまるで川の流れのようだ。反対方向に進む一群の人びとは一列になって突き刺さるように流れを分けていく。それが途絶えるとふたたび流線は合わさる。息子はいつものように「行って来ます」と言って別のプラットホームに行く。勤め先に着いて、まずメールを読む。これが習慣だ。

火曜日、朝、電車の中でもみくちゃになりながらも、前に見たことのある乗客がいることに気づく。後ろの人の握りこぶしが背中に当たって痛い。耐えられなくなって、肘で後ろに合図する。新宿駅で下りると、後ろにいたと思われる若い男が睨む。同じ方向に行くではないか。知らん顔していたが怖かった。ストレスをわたしに向けて発散しないで欲しい。勤め先では最近得た「宇宙空間掩蔽」なるアイデアが実行可能かどうか調べるために簡単な計算を始めている。計算力が落ちたので結果を確認するために、昨日途中まで使い古しの紙でやっていた計算を初めからやり直す。

水曜日、新宿からはいつものように中央線の最後部の車両に乗る。遠くの学校へ通う子ども達が途中の駅で次々と乗り込んで来て、昨日と似たような会話を交わしている。武蔵境駅前のバス停で並んでいると、昨日わたしの直前にいたひとが、後から来て当然のようにわたしの前に入り、会釈する。ルール違反だよ。でもまあいいか。勤め先では昨日と同じ計算を始める。何度やっても結果に不安が残る。

木曜日、息子とともに 6 時 47 分発の電車の後ろから 3 両目、車両の一番後ろのドアから乗り込む。今日も背中にこぶしが当たる。なんてことだ。同じ男が後ろにいるらしい。昨日は少し離れた場所にいたようだが。また新宿で睨まれてしまった。先週までは木曜日に共同研究者の Y 氏が議論のために来ていたような気がするが、定かでない。そうであったとしても、彼も自分の研究室で昨日までの仕事に追われているに違いない。

金曜日、電車の中で同じ顔ぶれを見て安心する。背中の痛いのも同じだ。新宿での下りる順序もほぼ一緒だ。バス待ちの列はいまや同じ顔ぶれ同じ順番になった。いつも 12 時半にコーヒーを飲み来る K 氏が 12 時 20 分に現れる。なぜか怒りが湧いてくる。12 時半でなくてはいけないんだ。彼もなんとなく落ち着かないようすで、出直してくる。午後、昨日までやっていた計算を始める。だが、新しい計算用紙を使うのはいけないような気がする。結局、昨日

使っていた計算用紙の計算式をボールペンでなぞりながら昨日と同じところまでいった。

土曜日、今日も出かけなくては。息子も起きて来る。妻はすでに同じ朝食を用意している。同じ物を買って来るようだ。冷蔵庫の中身も同じ配置にしてある。わたしの身体は油切れのようになって動きが緩慢になる。駅に行くと、昨日と同じようにホームには続々と人が集まってくる。2、3 人が転ぶのを見た。足元に気をつけてくださいよ。電車が来る。われわれが同じ車両の同じドアから入ると、ほっとしたような声が近くから聞こえる。勤め先では、昨日と同じメールが来ていたので同じ返事を出す。夜、家に帰ってテレビを見ると、アナウンサーが昨日とまったく同じニュースを伝えている。それでいいのだ。

日曜日、朝起きると節々が凝っている。首を動かすのも辛い。ほぼ自動的に朝食を流し込み、息子と一列縦隊で駅に向かう。電車の中では、乗客の配置が昨日と同じになるように狭い中で微妙な調整が行なわれる。武蔵境の駅でいつものように階段を下りるつもりであった。だが、つまづいてしまった。ふわっと浮いて背中から落ちた。痛っ。階段には 14 段毎に踊り場があって、幸い下までは落ちず最初の踊り場で止まった. 良かった。衝撃は背中のバッグが受けてくれた。骨は折れていないようだ。

　だがもうダメだ。昨日と違うことをやってしまった。立ち上がる気力がない。近くを通るひとは非難に満ちた表情でわたしを見る。下から登ってくる通勤客がわたしを踏み越えていく。わたしは痛みをこらえ、あお向けのまま目をつむった。